

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 1日現在

機関番号：32665

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22830087

研究課題名（和文） 社会的排除の解明と多層的包摂の構築：「埒外」の社会史にむけて

研究課題名（英文） “A sociological study on social exclusion and construction of multilayered inclusion: Toward a social history of ‘social exterior’ ”

研究代表者

山北 輝裕 (YAMAKITA TERUHIRO)

日本大学・文理学部・講師

研究者番号：50579109

研究成果の概要（和文）：戦後の日本史におけるさまざまな都市下層を事例に、彼らと他者との関係の多用な現れを検討した。また、現代の野宿者と地域の相互作用を検討した。都市下層を包摂し、同時に排除するアサイラム空間は、制度や施設によってのみ完結するのではなく、それを構成するアクターの日常的実践によって達成されることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research examines interactions between urban poors and their supporters in postwar Japan. In particular, it focuses on interactions between homeless people and local residents in contemporary Japan. It argues that asylum spaces which include/exclude urban poors would not be achieved only through their institutionalization. Rather, such spaces are maintained through everyday practices among actors involved.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	860,000	258,000	1,118,000
2011年度	930,000	279,000	1,209,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,790,000	537,000	2,327,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：野宿者支援・ホームレス・社会史・質的調査

## 1. 研究開始当初の背景

2002年、ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法が成立し、自立支援策が整うなか、2008年で中間年にいたった。開始年度との対比で、野宿者数が減少したことから、

対策は一定程度成功したかにみえる。しかしながら、この5年間で強制排除は3回、また野宿生活の長期化も問題視されている。各地の野宿者支援団体がNPO化するなか、行政との協同がはじまった。そして近年では、「地

域福祉」が理念として掲げられはじめた。これは、野宿者以外の、老人・障害者などの福祉領域において90年代以降、「地域福祉」への転換がなされてきたことと平行である。しかし自立支援システムから漏れる人々、すなわち包摂できない人々の「地域福祉」はいったいどうなるのだろうか。そもそも現行の（あるいは理念として掲げられる）「野宿者の地域福祉」とは、厳密に言えば、「元野宿者の地域福祉」（あるいは野宿を脱却する意志のある人のための）である。この表現の違いは、些細なようにみえて、じつは決定的に似て非なるものである。なぜなら野宿者が野宿のまま、「地域福祉」を享受することは、きわめて難しいからである。これまで申請者は、いわゆるボランティアがはからずも野宿者にとって権力作用を及ぼす問題を見据えつつ、現に野宿者がいるなかで、意図せざる結果として（あるいは意図して）都市に創発してしまった（した）「路上コミュニティ」の可能性および、野宿者の〈地域福祉〉をフィールドワークから構想し、博士論文として提出した。

上記の目的は、経済・社会・政治的次元といった複合的な不利だけでなく、空間的排除あるいは、福祉制度からの排除といった多層的な「社会的排除」をうける野宿者が、複合的な包摂を果たしうるうえでもきわめて有意義と考える。また、これまでの社会学的研究は、介入の困難性を十分にはつきつめず、しばしば野宿者を客体とみなしてきた（社会病理学）。あるいは、反省的に野宿者の日常実践に着目するも、野宿者の抵抗が支配的価値観に回収される困難性を十分には捉えることができなかった（解放社会学）。これらの研究に多くをおいしつつも野宿者支援団体への参与観察をとおして、野宿者と支援者との関係性、あるいは「当事者性」を協同の観点から捉え返す点に本研究へと接続するための独創的な繋留点がある。すなわち、本研究は野宿者と支援者との協同のエスノグラフィをふまえて、協同する両者の外部のアクターとの相互作用の解明を残された課題として設定し、多層的包摂研究を深化させる、という当初の目的があった。

## 2. 研究の目的

野宿者をめぐる制度的排除のメカニズム、そして野宿者に向き合う支援者の困難性の知見を他の領域に応用可能なものとして構想する。その際に、1. 意図せざる排除、2. 向き合うことが困難で黙認されがちな現象、3. 法外でもなく無法でもない空間を「埒外」と規定し、現在の差別問題・社会問題を質的調査・社会史の手法から考察する。

## 3. 研究の方法

平成22年度は、(1)「埒外」の社会史構想の具体化に向けたフィールド事前調査(23年度は本調査)、(2)フィールドデータの社会史的再解釈、(3)学外協力者との有機的連携、の三つの作業により構成される。これらの初期作業によって、本研究計画のオリジナリティを洗練させる。平成23年度は、「埒外」の発生メカニズムの検討、「埒外」をめぐる社会史の視座の構築、(6)3年目以降の研究展開に向けての作業(および本調査)の三つにより構成される。これらの作業を通して中間報告を行い、将来的に本研究計画を刊行する上での基盤固めの期間とする。

## 4. 研究成果

平成22年度は、研究計画において掲げていた「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」において活動する全国の中学・高等学校教員への聞き取りを掲げていたが、大阪(2人)・神奈川(1人)・熊本(1)・兵庫(1)の教員に聞き取りを行った。地域・学校ごとに授業において野宿者の取り上げ方や生徒の反応に差異があることが明らかになった。

たとえば、野宿者が集住したり、日雇労働者が住む寄せ場に隣接した学校では、生徒が日常的に幼少の頃から野宿者・日雇労働者を見たり、接触したりしているため、授業の反応としては身近なものとして捉えることができる。一方地方で野宿者も少なく、また郊外の学校では野宿者を見たことがない生徒も少なからずいるため身近なものとして捉えることができないなどの実態を知ることができた。今後も全国各地の教員に聞き取りを行うなかで野宿者をめぐる知識の受容について考察を深めていく予定である。

なお、この「授業づくり全国ネット」への聞き取りを申請者は以下のようなインパクトがあると位置づけている。野宿者への強制排除は特別措置法以降、複数にわたり行われている。そのなかでも大阪市のある公園における強制排除の際に、地域住民から強制排除反対署名が集まったことが注目された。その背景には野宿者が地域住民と日常的に交流していたことが明らかになっている。このようなことから申請者は、野宿者による地域住民との交流も、教員が子どもに野宿者のことを教えることも「地域との繋がり」という文脈において同一の水準として位置づけ、野宿者と地域の相互作用を考察するうえでのひとつの戦略的対象となると考えている。

また熊本の聞き取りの際に、インフォーマ

ントの方から野宿者を支援するNPOを紹介していただいた。

平成23年度も前年度に続き、戦後の寄せ場を中心とした都市下層をめぐる資料を収集した。そして、現代日本の路上にとどまる野宿者の多層的な包摂を課題として設定したうえでその契機を探るべく、野宿者を含めた戦後の日本史におけるさまざまな都市下層を事例に彼らと他者との関係の多用な現れを検討した。

具体的には失業対策事業を担当する労務管理員による「にこよん労働者」の「のぞき」管理、1970年代日雇労働者運動、あるいは1990年代からの野宿者支援に注目し、〈アサイラム化〉の力と「第二次的調整 secondary adjustments」（ゴフマン 1961）のなかでいかにして残余が生成されるのか、それに伴い都市下層と他者との関係性の位相がどのような変化をたどったのかを検討した。この成果の中間報告は日本文化人類学会で報告することができた。

なお、申請者は当初研究計画において、「現代社会における社会的排除を受ける人々と、多層的包摂に介入する人々との相互作用を記述し、両者の協同の様相から当事者主権破綻のプロセスの解明、およびそのプロセスに動員される当該フィールドのローカル・ノレッジの記述、そして現代社会の支配的価値観に対してそのローカル・ノレッジのもたらすインパクトと限界を再定位する」と記していた。

そして申請者はこの成果において以下のようなインパクトがあると考えている。すなわち、研究の過程で、介入する人々あるいは、包摂に向ける人々の困難が残余として現れる局面、あるいは排除する人々ですら困難を抱えているという残余の局面が次第に明らかとなり、このことが「埒外」発生メカニズムとして重要なポイントを指摘していることになるのではと考えるに至っている。

また、申請者は2000年から2007年まで名古屋・大阪において野宿者を支援する団体に参与しながら、野宿者と支援者の関係性、当事者運動について社会的に考察してきた。それらの参与観察の経験を振り返るなかで、現場と調査者がつながる社会学的モノグラフ・調査法とはどのようなものかを考察した。

このことは、こうした参与観察の経験の再帰的な記述が、現場の歴史（社会史）や、現場における課題とどのように交差していくのかを考察することでもあった。その成果は、『はじめての参与観察』（ナカニシヤ出版）として出版した。

なお申請者はこの成果のインパクトを以下のように考えている。参与観察とは、社会学理論と現場の人々の対話によって、参与集団から今私たちが行きている社会を逆照射することができること、また参与観察とは、これまでの〈私〉の生き方をどうしようもなく見つめることとなり、そして対象の人々との出会いをとおして違う〈私〉への変化を羨望し、過去の自分の生き方と少なからず衝突しながら、実際に成長し、今後の〈私〉の生き方を強く方向づけていく、〈私〉と他者の生活の分ち難いぶつかりあいであることを指摘した。

また、前年度からの継続調査として、「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」を中心とした「野宿者授業」の聞き取りを予定していたが、熊本調査において、ある公園の野宿者と近隣の子どもの関係性について考察するために、野宿者への聞き取りを試みた。日本文化人類学会での報告内容の一部を加筆・修正し、この調査の成果と接続するかたちで『包摂と排除の人類学』（内藤直樹・山北輝裕編：近刊）に収められている。

なお申請者はこの成果のインパクトを以下のように考えている。排除と包摂の負のサイクルが際限なく続くのであれば、制度からもれた野宿者ととどまる人々にいかなる応答をとることができるのか。こうした問題関心のもと、子どもと野宿者があそぶ公園へフィールドワークし、野宿者への聞き取りから制度的包摂とは違う水準のかぎりなく包摂に近いなか＝日常的包摂へ着目したことに独創性があると考えている。もちろん野宿状態は排除の帰結であるが、こうした路上における出会いも少なからず発生し、この側面にまだこれまでの社会学は十分に検討を加えていないと考えている。

さらに、当初研究計画で提示していた「べてるの家」などの当事者運動への着目も、本研究期間中に現場の人々にコンタクトをとることが可能となり、研究終了時となる3年目以降である現在、池袋の当事者運動・支援ボランティアとして参加させていただくこととなった。引き続き当事者運動と支援者の関係性および地域との繋がりについて探究していきたい。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

(1), 山北輝裕、「〈社会学的映像実践〉を考

える——野宿者／ストリートを記録し使用することを題材に」『KG/GP 社会学批評別冊』査読無、2011年、45-58頁。

〔学会発表〕(計3件)

(1)、山北輝裕、「アサイラム空間と都市下層」日本文化人類学会、2011年6月12日、法政大学。

(2)、山北輝裕、「野宿者の移動と定住」日本社会学会、2010年11月6日、名古屋大学。

〔図書〕(計2件)

(1)、山北輝裕、ナカニシヤ出版、『はじめての参与観察——現場と私をつなぐ社会学』2011年、144頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山北 輝裕 (Y4@4-<G4` G8EH <EB)

日本大学・文理学部・講師  
研究者番号：50579109

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

内藤 直樹 (NAITO NAOKI)  
徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部  
研究者番号：70467421